野山の花 ― 身近な山野草の食効・薬効 ―

城西大学薬学部　白瀧 義明（*SHIRATAKI Yoshiaki*）

キキョウ *Platycodon grandiflorus* (Jacq.) A. DC.
(= *P. grandiflorum* (Jacq.) A. DC.)（キキョウ科 Campanulaceae）

梅雨が終わり，暑い夏の訪れる頃，山麓の山道を歩いていると茂みの中から紫色の花が顔を出しているのに出会うことがあります。最近では観賞用に庭などに植えられ，園芸植物として定着していますが，これがキキョウです。

キキョウは日本，朝鮮，中国北部，ウスリー地方などに分布し，日当りのよい草原などに自生する多年草で，根は肥厚して太く白色の直根。茎は直立して高さ 40 ～ 100cm になり，茎の切り口から乳液が出ます。葉は互生しほとんど無柄で長卵形，ふちには鋭きょ歯があり，質はやや厚く，下面は白色を帯びています。7 ～ 9 月ごろ茎頂および枝先の葉腋に美しい青紫色または白色のやや浅い鐘状の花を開きます。花冠は径 4 ～ 5cm で 5 中裂し，がくも 5 裂し，雄しべは 5 個，花柱は先端が 5 裂し，雌雄同花ですが雄性先熟で，雄しべから花粉が出ていて雌しべの柱頭が閉じた雄花期，花粉が失活して柱頭が開き他の花の花粉を待ち受ける雌花期があり，なるべく自家受粉しないような仕組みになっています。園芸品種には白色や桃色の花をつけるもの，二重咲きになるもの，つぼみの状態のまま花がほとんど開かないもの，草丈が低いものなどがあります。果実は，ほぼ球形のさく果で上端が 5 裂し，種子は長さ約 2mm です。キキョウの根はサポニンを多く含むことから生薬として消炎排膿，鎮咳去痰などを目的に気管支カタル，ぜん息などに用いられ，生薬名をキキョウ（桔梗，Platycodi Radix）と呼び，皮付のものを生干桔梗，皮をとったものを晒桔梗として区別することもあります。漢方では気管支炎，扁桃腺炎，化膿性気管支炎などの治療に桔梗湯，荊芥連翹湯，十味敗毒湯，防風通聖散，排膿散などに配剤され，成分としてはトリテルペン系サポニンの platycodin A（プラチコジン A）などを含みます。生薬に調整したものは外形的に人参とよく似ていますが，味とかおりが異なります。ニンジンはデンプンやサポニンを含み，初めやや甘く，その後，苦くなりますが，キキョウはンプンをほとんど含まず，イヌリンとサポニンを含み，初めほとんど無味で，後，えぐくなります。韓国ではキキョウをトラジといい，水にさらしサポニンを除いたり塩漬けにして，食用にするそうです。キキョウは万葉集のなかで秋の七草に歌われ，山上憶良が秋の七草を詠んだ歌に，「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花　萩の花　尾花葛花　撫子の花　女郎花また藤袴朝貌の花」とあり，「朝貌の花」はキキョウとされ，今では本植物は絶滅危惧植物の一つとなっています。キキョウは秋の花のイメージが強いのですが，実際の開花時期は六月中旬の梅雨頃から始まり，夏を通じて初秋の九月頃まで咲いています。花はつぼみの状態では花びら同士が風船のようにぴたりとつながっているため 英名を "balloon flower" と言います。また，花の形から「桔梗紋」が生まれ，美濃の山県氏，土岐氏一族は桔梗紋を紋所にしていた事で知られ，明智光秀も土岐氏一族であることから桔梗紋を用いていました。

写真１　キキョウ（花）

写真２　キキョウ（雄花期）

写真３　キキョウ（雌花期）

写真４　生薬：キキョウ（桔梗）

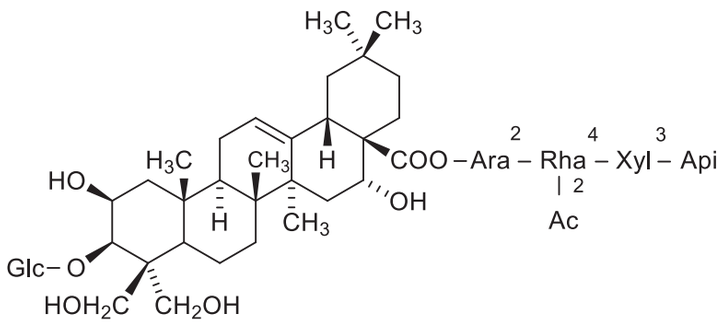

図１　platycodin A の構造式